

第2回 社会で生活する力を育む

講師：よこはま・自閉症支援室 篁 一誠氏

はじめに

今日は2回目の、「社会で生活する力を育む」というテーマでお話をさせていただきます。前回皆さんにお書きいただいたアンケートを主催者の方々がまとめて私のところに持ってきて下さいました。拝見した中で、いくつかお断りをしなければいけないなと思いましたが、最初にそのこととお話したいと思います。

*

ひとつは、「自閉症の話ばかりなので、知的障がいの話もして下さい」というご意見がありました。私はどちらかと言いますと自閉症の方しかお付き合いをできなかったのもので、それ以外の話は出来ない人間です。ですから今日も自閉症の方々のお話をさせていただきたいと思えます。そして高機能の方々のお話をするつもりもありません。

ふたつ目には、「パワーポイントを使って、もう少しわかりやすくお話をして下さい」というご意見がありました。私は非常に古くさい人間ですので、レジメ1枚で講演会をいつも行っております。今の時代は、パワーポイントを使うのが当たり前なのかもしれませんが、直接皆さんにお話したいという思いがあって、仲間も、「いい加減にパワーポイントを使いなさい」と言うのですが、今日も次回もこのレジメ1枚で進行させていただきたいと思えます。

まず、今日の"社会で生活する力を育む"という大きなテーマで、どうまとめていったらいいか、いろんなことを考えて、お手元のレジメのよなスタイルにしていこうと思います。

社会で生活するって、一体何なのだろうか……。簡単に言えばご家族以外と家庭以外のところで生活すること、それが社会で生活するということです。非常に単純なことなのですが、年齢とともに所属していく集団が変わっていきます。けれども、生活をする場所が変わっても、一人ひとは連続体として、決して急に変わることはないのです。

ですから、いろんな配慮をしていく時にひとつのパターンを作って、その中に押し込めるとというのが私は理想ではなくて、100人の自閉症の方がおられたら100通りの生活がある。それをどう私たちは見守るかということを考えていく必要があると思っています。大げさに言えば、ひとりずつに合った関わり方とか、その特性を基にした生活の基本というのが出来たら理想的かなと思っています。

横浜で仕事をするようになって、いろんな方に「思春期のことを話してください」と言われることが多くて、ずいぶん思春期のことについての話をしてきましたが、こういう発達期の特定の時期だけを話しても、私は何か自分の中で納得がいけないのです。個人というのは、生まれた時から一つ一つの年齢を積み重ねて発達というものが出てくるわけですから、発達段階の各ステージでどんなことを関わっていくか、連続ということを大切にしたいなと思っています。

今日は、社会で生活するという中での基本的な考え方、今までいろんなことを言われてきていると思いますが、その中で、「私はこんなふうに考えています」ということを具体的にお話したいと思っています。

1

基本の考え

〈1〉今その人の持っている能力を用いて、社会で生活をする

最初が、今その方が持っている能力を用いて社会で生活をするという考え方、これがノーマライゼーションという考え方なのです。無理矢理引っ張り上げてより大きな集団とか、子どもさんにとって負担のかかるような集団に入れることが本当にいいのだろうか。いろんな考えをお持ちの方とお目にかかって、あるいは集団の中での子どもさんの様子を見て、とてもその選び方に問題があるなど思っていることがあります。

たとえば、私が学校に行きました時に、6年生の2クラス・・2つのクラスにひとりずつ女の子さん、自閉症の方がおられました。ひとりには廊下側の一番前の席に座って、彼女の隣に置いてある金魚の水槽を右手の人差し指でツンツンとはじきながら、授業には全く参加していませんでした。その姿を見た時、ものすごく痛ましく感じました。この方にとって、このようにしていることは何の意味があるのだろうか。

もうひとりの方は教室の真ん中に座って、机を鉛筆でコツンコツンと叩いている。鉛筆が折れると鉛筆削りのところへ飛んで行って、授業中でも鉛筆を削っている。そしてまた席に戻る。途中で退屈するんでしょう、教室の前の踊り場に行ってピョンピョン跳ねている。そういう姿を見たことがあります。

先生方に「どうしてこの子どもさんたちは、このクラスにおられるんですか？」と伺うと、「ご家族のたつての要望で、どうしても普通学級で生活をさせたいと。私たちはいろんな方法で、子どもさんに合った教育をしていきたいと考えて提案をするのだけれども、結局受け入れてい

ただけず、6年間子どもさんたちは、このクラスで生活をしていきました」というお話を伺いました。

45分ただ座っている。大人が想像する以上に子どもたちにとってはきついことだと思うのです。本当にその人にとって適切な環境とは何だろうか。その判断はとても難しいと思います。私たちはすぐ解決したり、判断したり出来るわけではありません。いろんな視点からとらえる、いろんな関係のある人が考えて、処遇を考えていくということが必要だろうと思うのですが、まず疑問を持ち、その人の持っている能力、それをどう判断し、その人にとってどういう環境であったらより良い生活になるのか、この考え方は私はいつでも持っていたと思います。

あとでお話しますが、関わる側の配慮として能力や意欲をどう見極めをしていくか、その問題を含めて、本来お子さんにとって適した集団とは何か、これは大きな問題だと思います。時間をかけ、人の意見を聞けば聞くほど非常に混乱することもあると思います。

最終的には保護者の方々がお決めになっていただくことが必要だと思うのです。学校を選ばれる時でも、どの学校がいいのか、本当にそのお子さんに適した学校とは何なのか、そういう中で私は個別の支援やあるいは養護学校、こういう少人数の指導というのも大切だと思います。

その一方で、少し矛盾しますが、地域で生活することも大切だと思います。出来るならば、私は地域の中でお子さんたちが生活してほしいなと思います。

将来子どもさんたちがどういう環境で、どのような生活をされるということは誰にも予想出来ませんが、「彼は僕の同級生だよ」「〇〇ちゃんは、うちの子と同級生だった」、そういう方がいれば、地域で生活されることによって、障がいを持った方々の地域生活というものが支えられていく。そういう地域を外されてしまうということは、それだけ大変な場合もあるかもしれません。

この辺の選択というのは方程式があるわけではありませんので、お子さんの現在の持っている能力に応じて環境を選ぶということを、まず考えていただけたらと思います。

〈2〉育むものは、発達期により、個人により違いがある

二つ目は、何を育むか。あとで少しまとめてお話をいたしますが、発達の時期によって、一人ひとりのお子さんによって違いがある、そう考えていただきたいと思います。

一人ひとりに合ったものをどう見つけていくか。発達の色度というものは、基本的には人間の成長の色度と一定であると思うんですが、個人差があります。その個人差を無視してはいけない。見極めながら今何を育ててあげたらいいのか。どんなチャンスを与えてあげたらいいのか。それがどんなものであったらいいのか。そういう判断をいろんな場面で行っていく必要があると思います。

〈3〉基本を学ぶのは、家庭生活場面である

三つ目は、今日のタイトルにちょっと反するのですが、私は基本の学びの場を社会に求めません。家庭に求めています。どちらかという、社会生活をしていく場面というのは関わる人が常に一定ではありません。

たとえば、学校では担任の先生が6年間同じということは、まさにあり得ない。学年が変われば担任の先生も変わっていくことの方が多いと思います。当然そこで先生が変わってくると、関わり方や考え方が180度変わってしまうことも起こりうるわけです。お子さんたちがとても混乱をして、あるいは不安定そうな姿を見た時に、どこで誰が支えになったらいいのかと考えていました。

私はずっと医療の場にいましたが、医療で支えきれないことはたくさ